

中世・草戸千軒探検①

～船着場を中心に～

福山市を流れている芦田川の川底に埋もれていた草戸千軒町遺跡は、昭和36年(1961)から約30年にわたる発掘調査の結果、13世紀中頃(鎌倉時代)から16世紀初頭(室町時代)にかけて港町・市場町として賑わった町の跡であることがわかりました。常設展示の一つである草戸千軒Ⅰ展示室は、“よみがえる草戸千軒”をキャッチ

フレーズに、草戸千軒の町を実物大で復原した博物館のメイン展示となっています。時代は今からおよそ600年前の南北朝時代を中心とする広い意味での室町時代、季節は初夏の黄昏時(夕方6時頃)を設定しています。それでは、これから私たちが中世にさかのぼって草戸千軒を探検してみましょう。

展示室に入ると、港に着いた船から積み荷が陸揚げされているのが見えます。船は刳船くりぶねという一本の木を刳り抜いて造られたものです。草戸千軒ではこの刳船が盛んに使われていました。では、なぜこのような船が使われていたのでしょうか。

調査で見つかった遺構から考えてみると、草戸千軒のように水路や川が多くあるところでは、川の幅が細かったり、浅くても底の浅い刳船だったら小回りがきき、しかも、少人数で多量の荷物が運べるという利点があったからです。

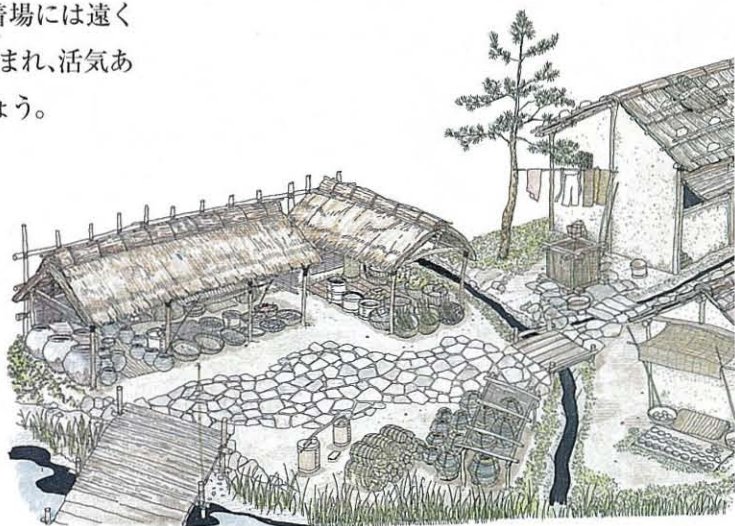
船着場には荷揚げを終えた備前(岡山県)で焼かれた壺やすり鉢などとともに、荷揚げ途中の米俵が船の中にも見られます。このように船着場には遠くからの商品や近在からの物資が運び込まれ、活気ある人々の声が飛びかっていたことでしょう。



草戸千軒Ⅰ展示室 全景



草戸千軒Ⅰ展示室 刳船



草戸千軒Ⅰ展示室 市場および船荷の陸揚げ情景